

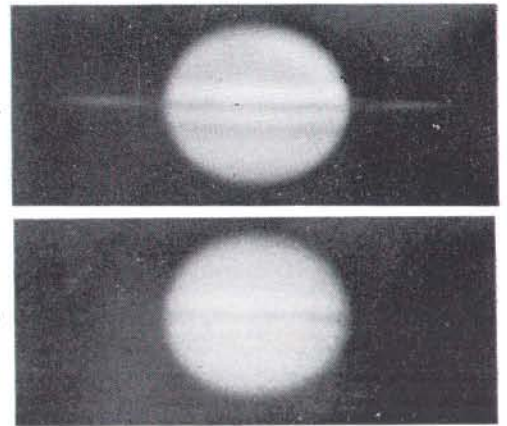
◇ 2月の天文暦 ◇

日 時	記 事
2 8	下弦
4 22	立春 (太陽黄径 315°)
8 17	ケレス 留
9 20	朔
14 0	月 最遠
17 1	水星 東方最大離角 18°
18 1	上弦
19 17	雨水 (太陽黄径 330°)
22 8	木星 月の南 4° 通過
23 21	金星 土星の北 1° 通過
25 3	望
26 6	月 最近
29 0	火星 月の北 2° 通過

土 星 の 環

土星は太陽系第6番目の惑星で、環をもったその美しい姿はあまりにも有名である。1610年ガリレオの発見以来この環は多くの人々に親しまれ、観測され研究されて来た。1966年には30年ぶりにこの環の消失が観測された。実際には1951年にも環の消失がおこっているが合の近くであったため観測はできなかった。

環の平面は黄道面に対して約27°の傾きをもっている。したがって土星の公転につれて環の見え方は周期的に変化する。まず土星の夏至の頃には太陽及び地球が環の平面となす角度は最大の27°となる。環は軸比が1:0.88の楕円に見える。環からの反射光のために土星の明るさのもっとも大きいときである。これは1928、1958年にみられた。次第に環の見え方は小さくなり、土星の



秋分の頃には太陽及び地球が環の平面を通過するので環は見えなくなる。このとき大望遠鏡でも環は見えないのでその厚さは15km以下と推定される。又、太陽と地球はある時間間隔をおいて環平面を通過するので、この間では環の透過光をみることになり、その光学的性質を調べるのに役立つ。これは1935、1966年におこった。冬至の頃には太陽及び地球が環の平面となす角は又27°となり見かけの明るさが最大となる。これは1943年にみられ1973年に再びみられる。春分の頃には太陽及び地球が又環平面を通過して環の消夫がみられる。これは1951年におこり次は1981年である。

写真は1966年の環の消夫の際に花山天文台60cm反射望遠鏡で撮られたものである。Aは9月4日15h7m U.T., 地球と環平面のなす角度は1°775である。Bは10月31日12h09m UT., 角度は0°038である。なお地球が環平面を通過するのは10月29日であった。

(鳴海恭典)

東京における日出入および南中 (中央標準時)

2月	夜明	日出	方位	南中	高度	日入	日暮
日	時分	時分	時分	時分	時分	時分	時分
1	6 8	6 42	-20.8	11 55	36.9	17 8	17 41
10	6 1	6 34	-17.4	11 55	39.8	17 17	17 50
20	5 51	6 24	-13.2	11 55	43.2	17 27	17 59
28	5 42	6 14	- 9.8	11 54	45.9	17 34	18 6

各地の日出入補正值 (東京の値に加える)

(左側は日出, 右側は日入に対する値)

分	分	分	分
鹿兒島 +30	+43	鳥 取 +20	+23
福 岡 +34	+42	大 阪 +15	+19
広 島 +26	+31	名古屋 +10	+13
高 知 +21	+29	新 潟 + 5	+ 1
仙 台 - 2	- 5	青 森 - 5	-11
札幌 - 3	-17	根 室 -13	-35

